

平均より見れば、毎年の倉上欠折穀量は僅に百分の一内外にして、難船の際載糧を海中に投じて附近の港壘に遁避する事は甚だ屢行はれし所なるを以て、溺死者の數は遙に損穀の割合よりも小なりしなるべし。されば之を以て海運の利得を否定せんとするは失當の言にして、況んや華人夷人の論の如き自己の怯懦を蔽はんとする牽強の言にして毫も齒牙に挂くるに足らざるなり。更に海運の勃興に伴ふ貿易の發達、水軍の修練、水産の利用、文物の融合等の如き間接の利益の著大なるは固より丘氏を俟たずして明確疑ふの要なし。尙ほ此の問題に關しては、古今圖書集成食貨典卷一八〇以下漕運の部に收めたる明、清人の議疏、皇朝經世文編卷四八下に載せたる阮元等十家の論說、明の梁夢龍撰海運新考三卷、清の阮元撰續修漕運全書三十卷、同施彥士撰海運芻言一卷等を見れば明清兩朝經世家の海運、河漕に對する思想の一斑を知るを得べし。(大正六年四月十四日稿)

碑文より見たる山東の佛教

堀 謙 徳

山東省は儒教の本源地として儒家の歴史に於て著名なれども、佛教關係の記録を傳ふること少し。幸にして山東諸地に碑文の遺存するもの頗る多く、これによりて佛教の傳播及び盛衰の大體を明にするを得べし。孫星衍の寰宇訪碑錄竝に山東通志卷二十一等に基きて搜索の結果、山東の佛教は第一開發期(晋・北魏・東魏)、第二擴張期(北齊)、第三充實期(隋・唐)、第四轉化期(北宋・金・元)、第五衰頹期(明清)の五期に分つことを得べし。

晋

佛教は支那に傳はりて以來、多く洛陽・長安の方

面を中心として弘通せられ、晉代に至り、漸く山東に傳はりしが如し。即ち晉代には外族の支那に入りて國を建つる者少からず、之と同時に佛教家にして支那に入りし者亦多く、其影響山東に及びしものか。

道宣の三寶感通錄卷中、西晉泰山七國金像瑞縁によれば、道宣著作の頃より三百五十餘年前即ち西晉の愍帝建興三年(西曆三二五)泰山の朗公寺建設せられしを説き、同書卷上、石趙青州東城塔縁には、西域の佛圖澄が東晉の咸和五年(西曆三三〇)石勒に封ぜられて大和尚となりて山東に教を傳へ、臨淄に興國寺を建立したりといへり。其後慕容徳が南燕の國を建て、山東に威を振ひしとき、僧朗を招きて、今の濟南府の南八十清里に神通寺を創立し、今尙ほ存在せり。南燕は東晉の隆安二年(西曆三九八)より義熙六年(西曆四一〇)まで存立せしが故に、神通寺の建設も亦略其時期を知るに足るべし。法顯は入竺の歸路商船に乗りて義熙九年(西曆四一三)今の青島の

東にある牟山(勞山)の南岸に漂着し、長廣郡守李嶷の歓迎を受けて一時膠州に留り、教を説きしことあり。これ等の記録によりて西曆第四世紀に於て山東に佛教の傳はりしを知るべし。

北魏

北魏は第五世紀の中葉佛教を排斥し、僧尼を誅し、佛書佛像を破毀したるが、數年の後之を復興したり。北魏の時代には僧朗・僧意・志湛の三人相繼ぎて泰山に住し、僧朗・僧意は金興谷の朗公寺に居り、志湛は銜草寺に入滅す。この時代泰山山脈の西に靈巖寺建立せられ、久しく山東の大寺院となり、後代北支那佛教の一中心となるに至れり。劉宋の元嘉二年(西曆四二五)には青州城内に龍興寺を建て、北魏の時代山東佛教の開發を示せり。

東魏

北魏の東西に分裂するや、山東は東魏の領域となる。西暦第五第六世紀には菩提流支の來朝、胡太后の崇佛、宋雲の入竺、曇鸞の布教等ありて佛教大に北支那に興れり。この時代の山東佛教碑文現存するもの僅に六面のみ。

- 龍洞山 天平四年(西曆五三七) 王叔照 彌勒像新刻安置
- 徂徠山大雲寺 興和二年(西曆五四〇) 胡元方等造像祈願
- 碑文 四面
- 神通寺 武定二年(西曆五四四) 揚顯叔 造像願文

これ等の石碑は今の濟南及び泰安附近に存するを以て、東魏時代この地方に佛教の存すると共に、彌勒崇拜の山東に行はれしを見る。彌勒崇拜は玄奘一派の法相家に於て鼓吹せし所にして、東魏時代既に山東に行はるゝこと稍や注意すべき所なり。

北 齊

晉より東魏まで、山東佛教は青州より泰山の西方に互れる一地方を主としたるが、北齊時代に至り、

大に擴張せられて、現今の泗水・益都・泰安・鉅野・濟寧・諸城・沂州・嘉祥・寧陽の九縣に跨り、今尙ほ存在する佛教碑文十六面あり、即ち左の如し。

碑石	書體	年號	西曆	縣名
維摩經碑	正書	皇建元年	五六〇	泗水
比邱明空等造象記	正書	河清三年	五六四	益都
石佛寺佛經碑	八分書	河清[]年		鉅野
紀僧諮造象記	正書	天統三年	五六七	益都
徂徠山佛號摩崖	八分書	武平元年	五七〇	泰安
映佛巖佛經摩崖	八分書	武平元年	五七〇	泰安
鐵塔寺薛匡生造象記	正書	武平二年	五七一	濟寧
徂徠山大殿岩經	八分書	無年月		泰安
比邱尼法細造象記	正書	武平四年	五七三	益都
張思文佛座題記	正書	承光元年	五七七	諸城
石經胎金剛經	八分書	無年月		泰安
普照寺恒[]造象碑	正書	無年月		濟寧
普照寺造象	正書	無年月		沂州
聖壽寺富胡女造象	無年月	無年月		嘉祥
水牛山文殊般若經碑	無年月	無年月		寧陽
水牛山佛經摩崖	八分書	無年月		寧陽

これ等十六面の碑文が散在せる區域は、山東半島の

中部及西部に互り、沂州の如き南部、諸城の如き東部にも存し、膠州の南四十清里に茂林寺の新設ありて、中央山岳地と芝罘方面の突出地との外には、廣く佛教の行はれしを見る。又た碑文によりて北齊時代山東佛教の性質を推定するに、維摩經、般若經の如き龍樹系統に屬する空門の大乗教が信仰せられしことを明にす。般若經は諸法皆空の教を説き、一切

の妄念を打破し盡すを以て主眼とするが故に、この素地を有する山東の佛教が、宋代禪家の繁昌を見るは自然の順序なり。前條十六面の碑文中、最も有名なるは泰山石經峪にある金剛般若經の刻文にして、縦一尺より一尺四五寸、横一尺二三寸より一尺五六寸までの文字九百六十字を存す。漢譯藏經には金剛般若經の譯本六種あり、即ち姚秦の羅什、東魏の菩提流支、陳の眞諦、隋の笈多、唐の玄奘、唐の義淨の各々譯出せるもの是なり、泰山にある刻文は羅什の譯本に同じ。

北齊滅びて北周が其領地を併合したる後は、山東も自然其領土となりしが、其期間も短く、加ふるに佛教排斥の傾向ある北周のこととて、僅に一面の碑文山東に存するのみ。

小鐵山摩崖佛經銘

八分書

大象元年

五七九

鄒縣

隋

隋は帝王自ら佛教を好み、厚く之を保護せり。文帝は詔して大興善寺を長安に建て、法朗の如き大家之に任し、又た天下に勅して廢寺を修理せしめ、親く大興國寺を創立し、遂に自ら受戒するに至る。煬帝も亦佛教を喜び、多くの寺院を建造し、自ら釋迦彌勒の座像を彫刻したるが如き、帝が佛教に興味を有せしことを知るべし。外國の佛教家には、北齊以來支那に留れる那連提黎耶舍の如き、闍那崛多、達摩笈多の如き名僧あり。支那人の佛教家には智顛ありて臺州天臺山に一念三千の法門を弘めし時代な

り。山東にては濟南の千佛山に興國寺新設せられて山東佛教の中心となる。今千佛山其他歴城縣内に存する隋代佛教碑文を擧ぐることに左の如し。

碑名	書體	年代	西曆
千佛山□□題名	正書	開皇元年	五八一
張興和等造四面象銘	正書	開皇三年	五八三
洞騎則有題名		開皇三年	五八三
比邱尼靜觀造象記		開皇六年	五八六
佛峪比邱尼靜元等造象	正書	開皇七年	五八七
千佛山劉景茂造象	正書	開皇七年	五八七
千佛山時告造象	正書	開皇八年	五八八
邑子□元等造象碑	正書	開皇八年	五八八
千佛山李景崇造象	正書	開皇十年	五九〇
千佛山□□造象記	正書	開皇十年	五九〇
千佛山宋僧海妻敬公主造象	正書	開皇十三年	五九三
千佛山楊文蓋造象	正書	開皇十三年	五九三
千佛山女花紅等造象	正書	開皇十五年	五九五
千佛山□□題名	正書	開皇十五年	五九五
洪福院佛經	正書	無年月	嘉祥
佛龕石幢	無題字		前阜

歴城縣以外にある山東隋代佛教碑文左の如し。

千佛山に九面、其外歴城縣内に五面、嘉祥曲阜二縣のもの各々一面、合せて十六面あり、殊に千佛山のもの多數なれば、千佛山が隋代山東佛教の中心たるの觀あり。陸耀遼の金石續編卷二には千佛山碑文七面を擧げ、前條に示せる所と多少の出入あり、今七面の全文を見ることに左の如し。

劉景茂造象

大隋開皇七年歲次丁未正月十五日弟子劉景茂知身非恆疾踰露草是以敬造 彌勒像一區伏□ 皇帝石
四 臣僚百官 石 勅 四 字 十世師僧父母見存眷屬一切 石 勅 衆生 共同□福

時皆殘造象

開皇八年五月十五日時皆□□爲□□□敬造釋迦像一□□法界衆生

李景崇造象

維大隋開皇十年歲次庚戌八月丙辰朔八日癸亥弟子李景崇 石 勅 知身非永固素體難存機變無留生化有易是

唐

唐は太宗・高宗・武后・玄宗等の諸帝多く佛教を好み、或は寺院を建て、或は翻譯事業の經費を官給し、盛んに其弘通を計れり。佛教家にも内地人外人共に大家を出し、華嚴家の實又難陀・杜順・法藏・澄觀の如き、律家の道宣以下の如き、法相家の玄奘、淨土教の善導の如き、密教家の善無畏・金剛智・不空の如き、禪家の希遷・懷海・希運・靈祐・義玄・良价の如き、翻譯家として達摩流支・義淨の如き人物輩出して未曾有の盛況を呈せり。就中義玄は山東省曹州の人、初め城南臨濟院に住し、後ち大名府興化寺に遷り、僧俗の歸依を受けたり。

唐代の山東佛教碑文の中、隋代以來佛教の繁昌せる千佛山の碑文八面あり、

碑名

書體

年號

西曆

千佛崖僧沙椽造象記

正書

武德□年

第七卷 (四三〇)

- 千佛崖僧明德造象 正書 貞觀十八年 六四四
- 千佛崖造象 王元□ 正書 永徽□年 六四四
- 千佛崖齊州刺史劉元意造象記 正書 顯慶二年 六五七
- 千佛崖南平長公主造象記 正書 顯慶二年 六五七
- 千佛崖趙王福造彌陀象記 正書 顯慶三年 六五八
- 千佛崖王萬元等造象 正書 永淳二年 六八一
- 千佛崖趙畔造象記 正書 文明元年 六八四
- 千佛山の外歷城縣に存するものは、
- 神通寺僧無畏造象記 正書 景龍元年 七〇七
- 佛峪遇緣造象記 正書 乾元二年 七五九

の二面にして、千佛山も合せて歷城縣存在の碑文十面あり。

青州附近の益都縣にも亦雲門山其他に十二面の碑文を見る。

- 龍興之寺四大寺 李邕 正書 無年月
- 雲門山季思敬造象 正書 天寶十一年 七五二
- 外に雲門山に同似の碑文四面 天寶十一・十二年
- 雲門山□性造象 正書 無年月
- 外に雲門山に同似の碑文二面 無年月
- 駝山僧法留造象 正書 無年月
- 陀羅尼經幢 沙門繼造 正書 咸通七年 八六六

城隍廟陀羅尼經幢

正書 光啓四年 八八八

即ち西曆第八第九世紀の間、玄宗より僖宗の世、青州方面特に雲門山に佛教の信仰ありて、佛像を奉納せしことを知るべし。

濟寧附近には唐代佛教碑文七面あり、その中三面を擧ぐることに左の如し。

晉陽山華特伊造石浮圖銘

正書 天寶九年 七五〇

鐵塔寺尊勝陀羅尼經幢

正書 寶曆二年 八二六

陀羅尼經殘字

正書 無年月

歷城青州の地方に陀羅尼の碑文あるは、西曆第九世紀密教思想が山東に行はれし證據なり。

長清縣には唐代佛教碑文四面存在する中、三面は靈巖寺にあり。

靈巖寺功德佛龕李遷等題字

正書 長慶元年 八二一

靈巖寺功德佛龕僧神旛題字

正書 長慶二年 八二二

靈巖寺牟塢證明功德記

正書 大中八年 八五三

これは靈巖寺に佛像を納めて追善供養をなしたる記念として存在し、唐の穆宗より宣宗まで靈巖寺が信仰の靈場たりし證據を示す。

淄川縣の唐代佛教碑文は龍興寺・普照寺・法王院の三ヶ所に四面あるのみ。内容は陀羅尼及金剛般若經等にして、龍興寺の陀羅尼幢の建立は開元九年（西曆七二一）なれば、玄宗時代に密教の行はれしを示せり。

滋陽縣（兗州）の唐代佛教碑文は龍興寺等に五面あり。内容は尊勝陀羅尼、般若心經の刻文にして、咸通五年より十一年（西曆八六四—八七〇）に至り、懿宗時代密教及般若系統の法門が行はれし證據たり。

上來列擧せし所、山東の唐代佛教碑文四十二面、濟南の千佛山、青州附近の雲門山、泰山山脈の西にある靈巖寺が山東佛教の中心となり、頗る盛大の狀況を呈す。又た唐代山東寺院建設の事實を見るに、歷城・鄒平・禹城・益都・膠州の諸縣に互り、濟南と青州との中間地方に普及し、膠州の如き遠隔の地にも、大順元年（西曆八九〇）建立の慈雲寺、大順元年建立の福勝院ありて、山東佛教宣傳の範圍甚だ廣し。又た

唐代山東佛教思想の傾向を見るに、阿彌陀・彌勒の如き理想佛を崇拜すること、前代に異ならずも雖も、天寶九年以後の碑文に陀羅尼を刻し、密教流行の證據あるは唐代末期山東佛教の特色と認むべし。

五代

五代は亂世なれども山東佛教碑文二十一面あり。後梁時代には泰安縣の小蓬萊山に五面、淄川の開元寺に一面合せて六面あり、乾化元年より貞明二年(西曆九一一—九一六)までの年號を記述す。後唐時代には長興四年(西曆九三三)の碑文一面、泰安縣冥福院土地牒あるのみ。後晉時代は西域との交通もあり、佛教稍や恢復し、泰安縣の冥福院、資福寺にあるもの七面、益都縣の二面、濰縣東明寺の一面合せて十面ありて、天福二年より九年(西曆九三七—九四四)に互り、陀羅尼の刻文ありて、密教の流傳を示せるものあり。後漢(沙陀)時代には乾祐三年(西

曆九五〇)濰陽縣に建てし父母恩重經一面のみ。後周時代には、濟寧の晋陽山、益都の雲門山、淄川の龍興寺に各一面あり、廣順、顯徳年間即ち西曆第十世紀中葉に屬す。之を要するに、山東の佛教碑文は後梁、後晉の時代、泰安縣を中心として信仰歸依の證據を有するに過ぎずと雖も、二百八九十年に互れる唐代の山東佛教碑文が四十二面なるに對して、僅に五十二年に過ぎざる五代の山東佛教碑文が二十一面を存するは、亂世としては比較的信仰の衰へざりしを立證するに足らんか。

北宋

北宋は太祖・太宗・眞宗の如き歴代の諸帝多く佛教を保護し、或は寺院を建設し、或は人を外國に派遣して法を求め、或は大藏經を出版し佛教上の著述を勅修せしむる等種々の獎勵を與へたり。故に太祖の世延壽の宗鏡錄成り、太宗の世に贊寧の宋高僧傳成

り、眞宗の世道原の景德傳燈錄成れり。而して宋代佛教の大勢は禪宗の興隆にあり。山東に於ける宋代佛教碑文を見るに、同じく禪宗の隆盛を示す。其中心は長清縣の靈巖寺、益都縣の雲門山にして、靈巖寺の宋代碑文は眞宗の景德四年(西曆一〇〇七)以來四十五面に上り、元符二年の碑は涅槃經偈を、建中靖國元年の碑は楞嚴經偈を刻す。今實例として三面を示せば左の如し。

靈巖寺韋勝經幢

正書

景德四年

一〇〇七

靈巖寺功德頌周忠告等題名

正書

天禧五年

一〇二一

題靈巖寺詩 杜堯臣撰

正書

至和□年

他の地方にある碑文は純粹に宗教的のものなれども靈巖寺には文學的の碑文をも雜へ、題靈巖寺詩の如き種類のものをも有す。靈巖寺の外に長清縣の大雲寺、五峰山、真相院(各一面)、巢鶴山(十六面)等にも碑文あり、長清縣全體にて六十四面に上る。益都縣にては、雲門山十三面、法慶寺等の四ヶ所に各一面あり、雲門山の碑文は乾德六年より慶歴八年(西曆

九六八—一〇四八)に至る年號を有す。泰安縣にては泰山(三面)、小蓬山(三面)が中心にして、其外に散在するもの四面あり。

歷城縣にては神通寺(二面)、佛慧山(二面)、龍洞山(四面)、正覺寺(一面)合せて九面ありて、紹聖五年より政和六年(西曆一〇九八—一一一六)に互る年號あり。臨朐縣にては仰天山(六面)、沂山、明道寺、崇聖寺(各一面)合せて九面ありて、淳化五年より至和元年(西曆九九四—一〇五四)に互り、仰天山が中心たりしが如し。嘉祥縣にては、七日山(四面)、洪山(二面)、外一ヶ所(一面)合せて七面ありて、淳化二年より嘉祐五年(西曆九九一—一〇六〇)に互る。濟寧縣にては、八蜡廟、普照寺、晉陽山、鐵佛寺に各一面合せて四面を有し、皇祐六年より宣和六年(西曆一〇五四—一一二四)に互る。其他二三面の碑文を有するに過ぎざる地方は之を略す。

之を要するに、山東の宋代佛教碑文は全部百六十

三面にして、中心は靈巖寺・雲門山・仰天山・泰山にあ
り、殊に靈巖寺は宋代山東佛教の首腦として禪家の
重鎮たり。

金

金は熙宗佛教を喜び、世宗・章宗・永濟王も亦佛教
を好み、或は寺院を新設し、或は高僧を崇敬す。殊
に世宗は長き治世の間皇后公主と共に一家擧て佛教
殊に禪宗を奉じ、禪宗寺院を建設し、章宗も亦前朝
の志を繼ぎて禪宗其他の佛教を保護せり。故に山東
に於ける金代佛教碑文の年號を見るに、世宗時代の
もの最も多數にして、熙宗・章宗時代のもの之に次
ぐ。金代佛教碑文合計七十七面に上り、其中二十面
は靈巖寺に存し、泰安・濟寧・益都等の諸縣にも、四
五面より七八面の碑文あり。靈巖寺の碑文は皇統二
年より大安元年まで(西曆一二四二—一二〇九)に互
り、禪師の碑文急に増加して、禪宗の發展を證明す。

今禪師に關するものを擧ぐれば左の如し。

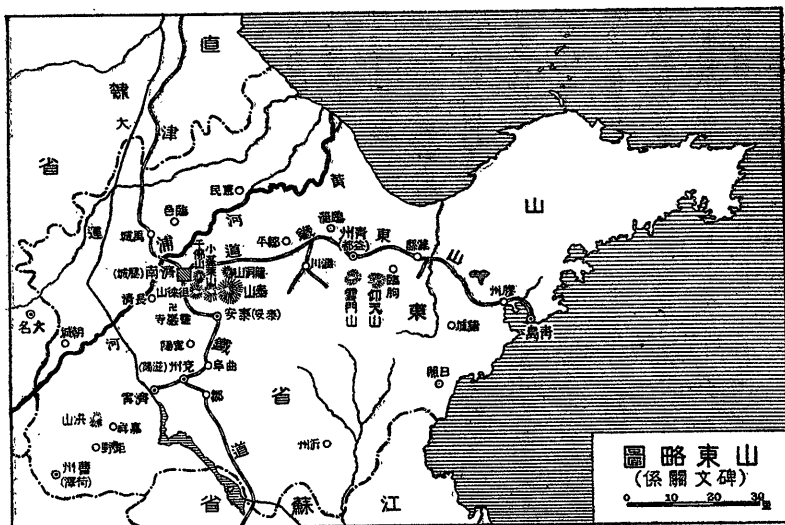
碑名	年號	西曆
靈巖寺定光禪師塔銘	皇統二年	一一四二
靈巖寺妙空禪師塔銘	皇統二年	一一四二
靈巖寺雲公禪師像記	皇統七年	一一四七
靈巖寺寂照禪師塔銘	皇統九年	一一四九
靈慶寺寶公禪師塔銘	大定十四年	一一七四
靈巖寺才公禪師塔銘	大定二十七年	一一八七

長清縣以外の禪家碑文には寺牒も亦存在す。

大明禪院牒	大定三年	一一六三	濟寧
普安禪院牒	大定五年	一一六五	濰川
壽聖禪院牒	明昌六年	一一九五	諸城
普照寺照公禪師塔銘	明昌七年	一一九六	濰川
蓋公和尚行狀銘	承安五年	一一〇〇	東昌
兩城山興國禪院牒	崇寧元年	一一二二	濟寧
瑄公禪師之塔	無年月		濟寧

即ち西曆第十二三世紀、金代に於て山東に禪宗の寺
院ありて大徳之に住し、殊に靈巖寺は君民の歸依淺
からざりしを察するに足れり。

上來金代に於ける禪家の碑文のみを擧げたるが、



其他一般の佛教碑文は、泰安縣の泰山（五面）、大雲寺・天封寺・冥福寺（各一面）、濟甯縣の晉陽山・大明院・普照寺・鐵塔寺・地藏院（各一面）、益都縣の長安嶺福勝院（三面）、雲門山（二面）、臨朐縣の仰天山（五面）の如きものにして、其他淄川・嘉祥等の諸縣にも散在せり。

之を要するに、金代山東の佛教は、靈巖寺・泰山・仰天山を以て信仰の中心となしたるを見るなり。

元

元は世祖忽必烈の世に發思八竝に膽巴の如き佛教家が西藏より來りて世祖の歸依を受け、歴代の帝王皆喇嘛教を保護し、宋金時代より隆盛に赴ける禪宗と共に元代佛教の特色をなせり。山東の元代佛教碑文は合せて一百面、其中靈巖寺に三十六面を有し、依然として禪宗の中心たり。靈巖寺の元代碑文にして禪家に關するもの左の如し。

清安禪師塔銘	至元十九年	西曆一二八二
福公禪師塔銘	至元十九年	一二八二
新公禪師塔銘	至元二十二年	一二八五
肅公道行碑	至元三十年	一二九三
達公禪師道行碑	大德五年	一三〇一
平公勤跡碑	大德十年	一三〇六
海公道行碑	皇慶二年	一三一三
就公禪師道行碑	延祐元年	一三一四
慧公禪師塔銘	至順二年	一三三一
讓公禪師道行碑	後至元年	一三四一

即ち十面にして、西曆第十三四世紀、世祖より惠宗までの間、靈巖寺に於ける禪宗の興隆を見るべし。

その外に淄川・歷城・諸城・臨淄・臨朐・惠民等の諸縣にある禪家碑文は大徳六年より延祐七年まで（西曆一三〇二—一三三〇）の十八年に互り、合せて六面あり。何れも第十四世紀のものなり。翻て元代の山東佛教碑文全部より多數の地方を列擧するに、

長清縣——靈巖寺（三十六面）外二ヶ所——三十八面
 臨朐縣——仰天山（四面）外四ヶ所——十四面——定宗三年より至正十一年（西曆一二四八—一三五一）

歷城縣——千佛山・神通寺・龍洞山等——十面——中統二年より泰定三年（西曆一二六一—一二六六）
諸城縣——廬山寺（四面）外三ヶ所——七面——至元十三年より至大四年（西曆一二七六—一三二一）
嘉祥縣——洪山（四面）外一ヶ所——五面——大徳八年より後至元三年（西曆一三〇四—一三三七）
泰安縣——徂徠山外三ヶ所——四面——定宗元年より延祐六年（西曆一二四六—一三一九）
益都縣——雲門山（二面）外一ヶ所——三面——中統二年より至元二十三年（西曆一二六一—一二八六）

元代山東佛教碑文百面の年代は太宗の十七年（西曆一二四五）より惠宗の至正十一年（西曆一三五一）まで百餘年に跨り、全く元代全部に互れり。而して其中心は長清縣の靈巖寺、臨朐縣の仰天山、嘉祥縣の洪山等にして、靈巖寺と仰天山とは北宋・金・元を通じて信仰の靈場なり。又た惠民・臨邑・朝城・日照の如き、前代に佛教碑文を見ざる地方に於て、元代の佛教碑文を見るは、元代に於て山東の佛教が新に廣く開教せられし證據なり。最後に元代山東佛教の特

色は喇嘛教の弘通にして、元代の山東佛教は禪宗と喇嘛教とを色彩とすること既に述ぶる所の如し。

結 論

山東の佛教は中北部竝に西南部を中心として變遷し、濟南の神通寺は晉代以來、泰安の泰山、青州の龍興寺、泰山西方の靈巖寺は北魏以來、濟南附近の龍洞山、泰安附近の徂徠山は東魏以來、何れも佛教の盛なる中心となり、般若系統の教義弘通せられたり。北齊は山東佛教の擴張期として、山東各地に般若系統の法門行はれ、隋唐には更に之を充實し、濟南の千佛山、青州の雲門山、泰山西方の靈巖寺が其中心として活動せり。雲門山は北齊時代の創立なれども、大に活氣を帯べるは隋唐時代であり、當時在來の般若系統の法門の外に唐代密教の弘通を見る。宋金元は山東佛教が禪宗化せし時期にして靈巖寺・泰山・雲門山・仰天山・龍洞山の如きは禪宗昌盛の狀況を示し、

元代のみは之に喇嘛教を混同したり。

大正四年十月二十日東洋史談話會に於て本題を講演しなる後、文學博士桑原隲藏氏は靈巖寺の位置其他山東に關する有益なる助言を與へられ、文學士中村久四郎氏は山東に於ける金の勢力に就きて注意を與へられ、著者を啓發する所少からず、茲に其厚意を謝す。

華夷譯語の編者馬沙亦黑

羽 田 亨

一

故那珂博士が名著成吉思汗實錄の序論に、元朝秘史の譯者の一人を馬沙亦黑なる蒙古人であると斷ぜられた頃に、自分は内藤博士から馬沙亦黑に關したことが清真釋義補輯といふ書物に出て居ると聞いたことがあつた(このことは其の當時の大坂朝日新聞に同博士の載せられた成吉思汗實錄の評論中にも見えて居たと記憶)、此の人はまた華夷譯語の編者の一人であることが、明の實錄に記されて居るのであるから、此の異聞に就いては少からず興味を感じたのであつた